後悔が先に立ったなら

後悔先に立たず、という言葉をご存じだろうか。
既に済んでしまった物事に対して後悔をしても意味が無い、取り返しがつかないという意味のことわざだ。
覆水盆に返らず、後の祭り、臍を噛む……。
似た意味のことわざはあれど、これほど単純明快に後悔を表す言葉も他にあるまい。
この言葉、実に素晴らしいとは思うのは私だけだろうか。
『後悔』は『後』から『悔』やむと書き、それが物事より先に起こるなんて在り得ないという満足の対義語、その言葉の何が素晴らしいのかと、もしかしたらそう思うかもしれない。
しかしいざ自分が大きな後悔に直面した時、この言葉は深く胸の内に落ちる筈だ。
あの時ああしていれば、この時こうしていれば……と。
その大小に拘らなければ、この世に人生で後悔をした事が無い人間等居ないに違い無い。
どのような偉業を書物に刻んだ英雄も、歴史に名を残せなかった無名の誰かも、今際の際に我が人生に一片の悔い無しと叫んだ世紀末覇者も、街中ですれ違う今を生きる一般人も。
誰一人として、後悔をせずに一生を終える事など出来はしない。
後悔なんてした事が無い、嘘を吐いた事が無い等と言っている人間が居たら、その人は間違い無く大嘘吐きだ。
嘘と後悔は、人間誰しもが通る道である。
――勿論、普段は使いもしない一人称で後悔についての持論を展開する、変人そのものである私も沢山の後悔をしてきた一人だ。
辛うじて後悔と言う言葉の端に引っかかったような些末事から、それこそ人生を左右するような一大事まで。
斯様な駄文を読んでくれている奇特な君達と同じく、後悔に塗れた身だ。
……いや、しかし後悔というのは結局気の持ちような訳であって、楽観的な人は小さく細かな後悔というものは持ち合わせていないのかもしれない。
もしかすれば、私がただ後ろ向きな性格で、優柔不断な人物だからなのかもしれない。
ここまで語っておいて何を言っているのかと思うかもしれないが、私も何を書いているのか分からなくなってきた所だ。
そろそろ本題に入らなければ、話があらぬ方向へと行ってしまいかねない。
既に手遅れ感もあるが、確かに誰かに伝えたい事実があったのだ。
慣れないキーボードに噛り付き、両手の人差し指で誤字塗れの文を打ち直しながら、それでも伝えたかった私の体験談。
夢のような、しかし確かに現実に在ったノンフィクションの物語。

――もし、後悔が先に立つような事があったら、どうだろうか。

「もし、もし、そこの貴方」

「もしかして俺の事ですか？」

「そうですそうです。緑のリュックを背負った黒髪の貴方の事ですよ。実は私占いのようなものをやっていまして、良ければどうですか？初回という事で代金はお安くさせていただきますし、あまりお時間も取らせません」

「いや、俺は……」

「そう言わず、さあさあ――決して、後悔はさせませんから」

　最初に一言、どこか事務的な声を掛けられた時、応えてしまったのが俺の運の尽き……いや、寧ろ運が良かったのか。
　とにかくこれが話の冒頭、俺の体験談の導入部分、起承転結の起に当たる。
　明らかに怪しげな女に声を掛けられて、街中で配られるポケットティッシュやチラシの類いを断れない人種の俺は、手を引かれるままに強引に狭い路地の方へと誘われた。
　これこそ占い師と言わんばかりの掛け布を頭に被り、これまたらしい衣装を身に纏い、そこに全てをぶち壊す、口元だけを覗かせる、上気した頬が笑顔と思しき仮面を被った二、三十代くらいの若い女だった。
　逆によくここまで怪しく、胡散臭く出来たものだと思う。
　寧ろここまで来ると不信感を通り越して感心する。
　――ここは都会とも田舎とも言えない街の、人一人寄り付かなさそうな路地裏やビル同士の隙間が集まる場所。
　隠れ家的というかアングラというか何というか、別世界に繋がっていても驚かないような仄暗い場所が好きだった俺は、いつものようにいつもの場所を真昼間から徘徊していた。
　別に家に居場所が無いとか大学に行きたくないとか、そんな深刻な何かを抱えている訳では無く、ただ単に興味本位の趣味の一つだ。
　ここら一帯は既に探索済みの場所が多く、閑古鳥だって寄り付くまいというような、隠れ家的飲食店をもう幾つも発見してきた。
　故にもう一、二回の探検で来る事が無くなる、そんな場所だったのだが……

「すいません、お姉さん。すいません」

「はい、なんでしょうか？」

「お姉さんっていつからここで占いの客引きやられてるんですか？これまで何回か来て一回も見た事ないんですけど」

「いつからも何も、私はずっとここでやらせてもらっていますよ。それから占いではなく占いのようなものです。あと私の名前はお姉さんではなく、降魔智里と言います。魔が降ると書いて"ごうま"、です。智里の方はいたって普通ですが」

「……えっと、それ源氏名なやつですよね？」

「いえいえもちろん本名ですとも。全国に十人といない珍名ですが、れっきとした本名です。岡山に多いんですけど、調べてみますか？」

「いや、別に……」

　流石に手を引かれたままが恥ずかしかった俺は、自分で歩くからと手を振り解いて大人しく背中を追って歩いていた。
　それにしても降魔は無い、あまりにらしすぎる。
　彼女の言う通り調べれば確かに実在するのかもしれないが、だからといってそれが本名であるとは限らない。
　それに証拠を見せてもらう程、真偽に興味が無かったというのもある。
　俺は右ポケットに入っているスマホを取り出す事はせず、見慣れた景色に目を配っていた。
　やはりと言うべきか、百メートルほど歩いた所で俺は確信する。
　この路地には見覚えがある。
　俺はあまり記憶力の良い方では無いが、こうした状況ではちょっとしたものだ。
　その先の角の右を見れば、今にも潰れてしまいそうな寂れたラーメン屋がある筈だ――ほら当たった。
　しかし当然目の前を歩く降魔さんは右には曲がらず、迷い無く左へと歩を進めていく。
　ここで違和感。
　この辺りは既に探索済み、先の分かれ道でラーメン屋では無く反対方向に進んだ場合、行き当たりにはまた曲がり角があるが、その先は直ぐに行き止まりだった筈だ。
　この人さては迷ってないか？
　背筋を伸ばして歩く降魔さんに不信感を覚えていると、やがて件の行き当たりへと辿り着き、そして曲がり角の先には行き止まりが――

「――無い」

　俺の目の前にあったのは……いや、無かったのは？この場合どっちだ？
　……とにかく、そこにはある筈のものが無く、無い筈のものがあった。
　――前に一度見た行き止まりは霧と消え失せ、代わりにこれまた胡散臭い占いの館があった。
　館とは言っても屋台のようなもので、その大きさは成人男性の平均身長と同じくらいの俺が、両手を目いっぱいに広げたのと同じくらいの横幅。
　言ってしまえば、そこらで見る絶対に行政の許可を得ていない露店占いという感じ。
　黒魔術に使いそうなイメージの爬虫類がぶら下げられていたり、何語とも判別のつかない貼り紙があったり、得体の知れない瓶に詰められたナニカがあったり。
　綺麗などとはお世辞でも言えない、雑多な印象が妖しい雰囲気を醸し出している。
　そんな店が目の前にあった。
　というか、これどうなってるんだ？明らかに前より行き止まりが後退してるんだが……。
　俺はごくりと口に溜まった唾液を飲み込む。
　頭皮からは暑さとは違う理由でじわりと汗が滲み、手は無意識に握った汗をズボンで拭う。

「さ、着きましたよ。そこの席にどうぞ、掛けて、下さい」

「それ大丈夫ですか？通れないんじゃ……」

「お気に、なさらず。いつもの、事で、すから……」

　降魔さんは壁のスレスレを通るように奥へ奥へと進んで行くが、明らかに苦しそうだ。
　ただでさえこんなに狭苦しい通路に露店を出しているのだ、そりゃ奥に行く店側の人間は大変だろう。

「ああ！」

「ほら言わんこっちゃない」

　俺は口の中だけでそう呟き、聞こえないくらいの溜め息を吐く。
　盛大な音と共に積み上げられた小物がひっくり返され、狭い路地に散乱した。
　俺は面倒だなと思いつつ、さりとて傍観している訳にもいかず荷物を地面に置き、身動きの取れない降魔さんの代わりに落ちた物を拾っていく。

正直こういうものにはあまり触りたくないのだが、致し方無い。
すいませんすいませんと言いながらなんとか通り抜けられた降魔さんと二人で拾う事数分、再度飾られる事無く小物は店の奥へと引っ込み、気持ちすっきりとした露店を挟み俺と降魔さんは向かい合わせで座る。
進められた椅子は硬くて座り辛く、この空間独特の空気と相まって妙に落ち着かない。
ソワソワするというか居心地が悪いというか、あまり長居したい感じじゃない。
早々に適当に、運勢でも占ってもらって帰ろう。

「それで、このお店は何を占ってくれるんですか？今年の運勢とか恋愛とか？」

「ですから占いではなく占いのようなもの、ですよ」

「……さっきから気になってたんですけど、占いのようなものってなんなんですか？占いでは無いと？」

「私も何と言えばいいのか、実の所分かっていないんです」

「はぁ」

「私のやっているサービスを説明するのにピッタリの言葉がないもので、初見のお客様には仕方なく占い師を名乗らせていただいているだけなんです。一応私が名乗っている通り名のようなものもあるんですが、そこの看板に書いてあるでしょう？」

「……看板なんて無いんですけど」

「あれっ？あっ、店の奥に仕舞ったままでした。すぐに持ってきますね」

……何と言うか、降魔さんは所々で抜けた人らしい。
店の物をひっくり返した事といい、看板を忘れていた事といい、更に言えばここまでの道のりは最短距離でも無かった。
多分、次来る事があれば俺の方が早く着けるだろう。
もう二度と来る事も無いだろうが、色々と台無しにする人だ。

「お待たせしました。これを、そちらに」

「あ、はい。……なんだこれ、『悔やみ屋』？」

「ええ、私はこの場所で『悔やみ屋』をひっそりとやらせて頂いています。――ようこそ、『悔やみ屋』へ」

両腕を広げて歓迎の体勢を取る降魔さんをよそに、俺は手の中の看板へ目線を落とす。
手渡された看板には確かに綺麗な文字で『悔やみ屋』とあり、その横には『あなたの後悔教えます』、『お値段は要相談』との文字が躍っていた。
『悔やみ屋』なんて見た事も聞いた事も無いが、どうやらただの店の名前というだけでもなさそうだ。
そういう職業という事だろうか。
確かにこんな名前では――

「初見のお客様は寄ってきて下さいませんでしょう？」

細めた目で覗き込まれ、思わず顔を仰け反らせる。
俺の心を読むような降魔さんの発言にどきりとするが、これくらい一定の技術を持つ占い師からすれば苦でも無い事だと思い直し、そうですねと生返事を返す。
この手の心を読むような占い師の九割九分九厘は、テレパシー等という実在すら疑わしく、胡散臭い代物では断じて無く、確立された技術によって成り立っている。
占い前のアンケートなど事前情報から、さも真実を言い当てたかのように見せるホットリーディング、表情や格好や仕草や会話など、様々なその場の情報からさも言い当てたかのように見せるコールドリーディング。
前者は情報収集によって、後者はやや場数を必要とするが経験と勘によって、人の心を読んだように見せる事を可能にする技術だ。
あなた、内気な性格だとよく言われませんか？――それは見た目で分かるからよく言われるんだよ、あんたでも誰でも分かるだろう。
あなた、何か大きな悩みを抱えているのではないですか？――そりゃ人生、誰しも一つや二つでかい悩みくらい持ってるだろう。
あなたにはこの先大きな不幸が待っています――この先交通事故やら火事やら、人生で何かしらの不幸くらいあるだろう、何を当たり前の事を。
親が寿命で死んだりしても、それだって立派な不幸だ。
俺は誰にでも当て嵌まるような事を平気で言い、平気でラーメン数杯分の料金を要求してくる詐欺紛いの占い師を、これまでに何人も見てきた。
きっとこの降魔さんも……

「それでは始めましょうか。と、その前に当店の詳しい説明などは必要でしょうか――須郷

健斗さん？」

　その名前を聞いて、俺は不覚にも肩が跳ねたのを実感した。
　口元以外を覆う仮面の下に、図星でしょうという表情を浮かべているのだろうと思いつつ、俺は重い口をゆっくりと開く。
　何故なら、この人が口にした名前は――

「あの、俺茅場って言うんですけど……」

「ええ!?」

　俺の名前ではなかったからだ。

「え？でも貴方のリュックには確かに須郷と……」

「あー、これ友達から貰い物なんですよ。ほら、中学とか高校の行事で自分のカバンに名前書いたりするのあったじゃないですか。その時のを貰って使わせてもらってるんで」

「か、変わってらっしゃるんですね」

　多少自分が人と違う事くらいは自覚しているが、目の前のこの人だけには言われたくない。
　流石の俺も、降魔さんより変わっているという事は無い筈だから。
　しかしやはりと言うべきか、この人もアングラにありふれた占い師の一人でしかなかったらしい。
　場所と職業に似合わない声だけ気になるが雰囲気はあるし、俺も多少浮足立っていただけに残念だ。
　降魔さんはこほんと咳払い。

「それで、説明は必要ですか？」

　正直期待していた感じと違っていた為帰りたいのだが、折角ここまで来た事だしと自分を無理矢理に納得させる。
　それは誰に張るでもない、しようもない自己完結した意地だった。

「じゃあ、お願いします」

「分かりました。――では『悔やみ屋』について説明します前に、茅場さんは後悔先に立たずということわざをご存じですか？」

「はぁ、まあ」

「一応説明させていただきますと、既に済んでしまった物事に対して後悔をしても意味が無い、取り返しがつかないという意味のことわざですね。そして当店の行うサービスは正にそれに関するものです」

「はい？」

　正にそれ？それってどれだ？
　話し始めすぐに引っかかった俺をよそに、降魔さんはペラペラと説明を続けていく。

「『悔やみ屋』とは、お客様が近い内に抱える事になる後悔を物事が起こる前にお知らせし、限りある人生を少しでも後悔の少ないものにしていただくためのサービスを提供するお店です。お値段はお客様の後悔の度合いによって要相談。高級寿司店のネタが時価になっているようなものだとお思いください」

　降魔さんの言っている事が、俺は多分半分も理解できていない。
　俺の後悔を事前に教える？それは何の冗談だ？それが未来予知と同義だという事を、この人は分かって言っているのか。
　いや、普通に人の運勢を占うのだって未来予知なんかじゃなく、情報と観察による紛い物だ。
　後悔を教えると言ったって、所詮似たようなものでしかないのだろう。
　あと、例えるにしても高級寿司は無い。

「……俺は既にここに来た事を後悔しかけてるんですが」

「あはは、ご冗談を。私は言いましたよ？――決して後悔はさせませんと」

　――心底ゾッとした。
　ただでさえ秋も半ばで肌寒い路地で、更に一段階冷え込むような感覚に、俺は怖気を覚えた。
　さっきまでのどこか抜けた降魔さんが嘘のように、今俺の目の前には『悔やみ屋』という

一体の生き物が存在している。
　元から感じていた常外の雰囲気と、ムードを台無しにするやや事務的な声が不合理な程に組み合わさり、精神が呑み込まれる。
　俺の口は最早思い出したように呼吸をするだけで、声は完全に奪い取られていた。
　見えない筈の仮面の奥の瞳に、俺の視線が絡め捕られる。

「それで、どうされます？茅場さんの後悔、ご覧になりますか？……茅場さん？」

「え？あー、えーと……それじゃあ、折角なんで」

　こくりと頷くこの時の俺は、間違い無く正常な判断が出来ていなかった。
　普通なら、こんな得体の知れない女から逃げていて当然で、正しい判断だ。
　いや、仮に俺が冷静な状態でも、やはり頷いていただろう。
　だってこんなにも心が躍る状況で、この俺が逃げる訳が無いからだ。

「ご利用ありがとうございます。それでは……」

　俺の言葉を聞いた降魔さんは口元だけで分かるくらいに嫣然と微笑み、それから足元から取り出した物を机の上へと置いた。

「それでは利き手でこの水晶に触れてください。そこから先は私の指示通りに」

　小さな座布団のようなものの上に乗った、円球の透き通った水晶玉。
　占いと聞いてイメージする代表格の登場に、俺は困惑を隠し切れない。

「分かります。分かりますよ茅場さんの言いたい事は。胡散臭いとか、こんなもので、とかそういうのでしょう？まあ、この水晶に関しては何の変哲もありませんからね。ご存じですか？占い用の水晶ってネットで買えるんですよ、一万円ちょっとくらいで。本当に便利な世の中になりましたよね。けれどご安心を。この水晶はあくまで雰囲気作りであって、必須の品ではないのです。私がここにいて、貴方がここにいる。それさえ揃えば水晶玉だろうとビー玉だろうと、関係はありませんから」

　ほんの少しだけ先までの雰囲気を取り戻した降魔さんに、しかし俺は安心感というものをまるで得る事が出来ないでいた。
　それも一度見れば忘れられない、人の心を絡め捕る魔性のせいだ。

「————」

緊張のせいで乾く唇を軽く舐め、生唾を呑み込み、俺は降魔さんの指示通りに右手で水晶玉へと手を伸ばした。
ゆっくりと触れたそれは秋の季節にひやりと冷たく、想像通りのすべらかな感触をしていた。

「手を触れましたら、次は意識を集中させるように水晶玉を見つめて下さい。そうすれば茅場さんは自分自身の後悔を見る事ができるでしょう」

「見つめるだけ、ですか？」

「ええ、見つめるだけです」

そのあまりにも単純な工程に拍子抜けしつつ、俺は言われた通り水晶玉を見つめる。
が、暫く経っても特段何かが映るでも無く、自分の見慣れた顔が歪んで見えるだけだ。
何か間違えただろうか、このままでいいのだろうかと考えていると、すっと白魚のような手指が視界に映る。
ぎょっとして顔を上げると、その手は降魔さんの肩に繋がっていて、丁度二人で水晶玉を持っている形になっていた。
柔らかく微笑む仮面の奥、深淵から覗く黒瞳と初めて視線が絡まり、それが何だかいけない事をしているかのようで気恥ずかしく、目線を逸らすように再度視線を落とす。
するとなんだろうか、先程まで何の変哲も無かった水晶玉の奥がぐるぐると渦巻くように感じられ、不思議と目が離せなくなって、次第に、俺は————

「おかえりー。あんた帰ってたんなら声くらいかけなさいな」

「……ただいま」

　湯沸し器のうるさい居間に入ると見慣れた寝姿、だらけ切った母がテレビを見ながら呆れたみたいな声を出した。
　時間はまだ昼だが、そういえば今日はパートが休みなのだったか。
　轟々とやかましい湯沸し音に対抗する為か、やけに音量の大きい木曜昼の帯番組からは、薄ら寒い笑い声が響いていた。
　子どもの頃はよく見ていたこの番組を、つまらないと感じるようになったのはいつからだっただろうか。

「今日は学校どうだった？」

「そんな毎日変わるもんじゃないし、大体今日は授業無いって言ってあったし」

「あーそうだったっけね。そうそう、今日買い物行くけどなんか買っておいて欲しいものある？」

「特に無し。いってら」

　どうせ親がいるならもう少し外にいればよかったと損をした気分になりつつ、俺は適当に返事を返して早々に二階の自室へ引き上げる。
　部屋に入ってすぐにリュックを放り、さりとて着替える事はせずにベッドに横になり、真っ先にスマホのゲームアプリを開く。
　丁度昼から引きたいガチャがあって、着替える手間すら惜しかった。
　逸る気持ちを押し止め、期待と焦燥を込めつつガチャへと臨んだのだが……

「ちっ……」

　結果は惨敗、引き続けている内にムキになってきて、結果こつこつ溜めてきた石を全消費するという最悪の結果となった。

「はぁ……」

虚無感と脱力感と共にスマホを放り投げ、嘆息して目を閉じる。
これが普段なら引き際を誤ったりしないのだが、今日はどうにも熱くなり過ぎたらしい。
自分のせいとはいえ、すり抜けすら無しとは悔やんでも悔み切れな――

「……結局何だったんだよ、あれ」

そこまで考えてふと、脳裏に特徴的が過ぎる姿の占い師擬きがよぎり、さっきよりも重苦しい溜息を吐いた。
――結論から言えば、俺は自分の後悔とやらを見る事は叶わなかった。
五分、十分と居心地の悪い時間を過ごしたにもかかわらず、水晶玉はうんともすんとも言わず沈黙を貫いたまま。
焦る降魔さんが撫でてもさすっても、当然ながら何かそれらしいものが冷たい鉱物に映る気配は無かった。
申し訳ございません、いつもならこんな筈は、お代は結構ですので。
そんな謝罪とも言い訳ともつかない話をする降魔さんをよそに、俺は騙されたという怒りでは無く、やっぱり何も無かったのかという落胆に沈んでいた。
結局の所、俺は『悔やみ屋』というものに期待していたのだ。
試せど巡れど外ればかりの占い師、最初は探検のついでに楽しんでいたそれらも、占いの仕組みを調べ理解してしまえば、陳腐でありきたりな偽物が顔を覗かせる。
頭では分かっているのだ、占いに本物も偽物もありはしないと。
占いとは極端に言ってしまえば、後付けの事象から的中したと錯覚するバーナム効果でしかない。
朝のテレビでは数分のコーナーが組まれ、雑誌では片隅のコラムに載り、良い結果の占いは信じ都合の悪いものは信じない、その程度のものでしかないのだ。
けれど、期待してしまうではないか。
明らかに記憶と異なる路地裏、行き過ぎているとしか思えない格好、唯一無二の謳い文句、そして体の芯が凍えるような、妖しくも惹かれるその眼。
普段感じない感覚があれば、特別な事象の前触れと期待したって、別に。

「……けど」

けれど期待は裏切られた。
占い師ガチャは大外れ、期待も大外れ、時間も気力もどぶに捨てる羽目になってしまった。
意図せず、噛み締めた奥歯に力が入る。
ぎりぎりと不快な音が鳴り、余る気持ちを震える吐息に乗せて吐き出す。
今更、怒りを覚えた所で何にもならない。

ただでさえ無駄な時間を過ごしたのだ、これ以上『悔やみ屋』のせいで不必要なエネルギーを消費したくはない。

「……今日は疲れた」

この短時間でもう何度目かの溜息を吐き、左の前腕で目を覆うようにして脱力した俺は、じわじわと穏やかな波のように押し寄せる睡魔に身を預け、ゆっくりと疲労した意識を手放した。
あんなにも怪しい女に、ついて行くんじゃなかったと後悔しながら。

「……あぁ……もうこんな時間か」

存外疲れていたらしい。
目を覚まし、軽く欠伸をしてふと時計を見やると、短針は五の数字を指し示していた。
時間で言えば三、四時間は寝ていただろうか、手の甲で目を擦りつつ上半身を起こす。
こんなに長い間眠るつもりは無かったのだが、過ぎてしまった事は仕方が無い。
目覚ましでも掛けておけばよかったかと軽く悔みつつ、ベッドから立ち上がってリュックから飲止のペットボトルを引っ張り出す。
生温い緑茶で渇いた喉を潤しつつ、空になったペットボトルを既に一杯のゴミ箱に押し込む。
外着を脱いで洗濯籠に放り込み、部屋着に着替えてからついでに散らかった部屋を片す。
そうして小綺麗になった部屋を眺めて小さな達成感。
これが続けば言う事は無いのだが、どうにもサボりがちになってしまっていけない。
ゴミ箱の中身をビニール袋に纏め、代わりに新しいビニール袋をゴミ箱に敷く。
あとはこれを下に持っていけば完了だと、部屋の外に出て初めて気付いた。
下の階がどたばたと騒々しい。
そういえば、買い物に出かけた母もそろそろ帰っている頃合いか。
この騒音も、飽き性な母が効きもしない踏み台昇降でもしているせいだろう。
それ専用の台まで買っておいて長続きせず、そのくせこうして時折思い立って始めるのだから厄介極まりない。
一言文句を言ってやるべく、苛立ちを隠しもせずに音を立てて階段を降り、居間の扉を一気に開け放つ。

「あれ、父さん？仕事は？」

しかしそこに母の姿は無く、代わりに額に汗を浮かべて家の中を駆け回る父親の姿があった。

「急いで帰って来た。お前も準備を済ませてすぐに行くぞ」

「行くってどこに」

「お前、携帯は見てないのか」

父の正気を疑うような声と表情に、何故かその時の俺は無性に腹が立った。

だからその腹の中の感情のままに、吠える。

「だから何がだよ！」

「母さんが買い物の途中で事故に遭った！俺が帰ってすぐに病院に行くから準備しておけと連絡しただろう!!」

「は、ぁ……？」

そう反撃されて、意表を突かれて茫然と声を漏らす。
聞いた事の無い怒鳴り声で、見た事も無いくらい切羽詰まった表情で、これだけ必死な様子の父は初めて見た。
別に普段から愛想の良い部類の人間では無いこの人が、より一層余裕を失って目の前にいる。
その姿が、まるで知らない別人のようで。
ぐるぐる、ぐるぐる、耳の奥で目が回るみたいに、胸には鉛が詰まる。
何も、考えられなかった。

「……」

そこから先の事は、自分でもあまり覚えていない。
茫然自失、夢現。
当時の状態を表す言葉はそう多くないが、この言葉程的確に表す言葉もまた無いだろう。
だというのに、この体は自分が自分でないかのように受け答えをして、淡々と物事をこなしていくのだから不思議だ。
自分の事だったにもかかわらず、全てはどこか他人事のままに進んでいった。
――結局、母は助からなかった。
死因は車に撥ねられた後の頭部打撲による脳震盪、医者には打ち所が悪かった、というありきたりな理由を聞かされた。
その後遺体にも会わされたが、他に外傷はなく体は綺麗なものだった。
そうして亡くなった母を見ても、泣き崩れる父を見ても、俺は落涙も動揺も無く、変わらず冷静なままだった。
これなら、家で父から母が事故に遭ったと聞いた時の方が余程気が動転していただろう。
あの段階ではまだ生死も聞いていなかったのに、だ。
存外薄情な人間だったのだろうか。
母と、父と、俺と、家族水入らずの静かな部屋でただ一人、そんな思考をしてしまってい

る事が何より辛かったかもしれない。
　家での真っ白な思考とは対照的に、父が書類を書いている病院では無駄で無益で無用な考えが止めど無く湧いてきた。
　葬式はどうしようとか、大学に届け出は要るのかとか、今日の夜は何を食べようとか、そういえば明日からのご飯はどうなるんだろうとか、そういう。
　こんなの人でなしだ、人以下の怪物だ。
　考えては自己嫌悪、考えては自己嫌悪の繰り返し、そんな自分が嫌になってまた自己嫌悪。
　そんな自傷行為にも似た現実逃避をする内に、次第に時間の感覚は曖昧になっていく。
　ほんの五分ほど経ったかと思えば、父が書類を書き終えて俺を呼びに来た。
　どうやら、一旦家に帰るらしい、帰れる、らしい。

「————」

　玄関——見慣れた三足の靴を見て、目を逸らす。
　居間——母が愛用していたマグカップの中身は三分の一程残ったまま、温度を失って冷たく佇んでいる。
　台所——物の配置すら判然としないそこは母の残滓が強く、マグカップを洗おうとしていた俺を拒んでいるように見えた。
　家の中のそこかしこに、母がある。
　三人で住んでいた家なのだから、当然ではある。
　それ程までに、家の中には母が生きていた。
　今すぐに玄関から母が帰って来ても、然程驚く事は無いだろう。
　けれど頭の中の冷静な部分が、その醜い願望を否定する。
　それは死者への冒涜だ、俺も母も、それを許しはしない。
　悲しくはない、俺の中には、ただただ疲労だけが残っていた。
　家族の仲は特別良好でも険悪でも無く、まあ普通だったと思う。
　聞かれた事には答えるが、さりとて共通の趣味があった訳でも無い。
　ヒエラルキー的には母が強かったが、決して何かを強制してくる事も無く自由にさせてくれていた方だろう。
　大学までの進路も全て自分で決めて、口出ししてくる事は一度も無かった。
　日常的に一日どうだったかを聞いてくる所だけは、少し鬱陶しいと思っていたが。
　——もう少しちゃんと喋っておけばよかった、そんな下らない後悔が今更になって脳裏をよぎる。

「……ッ」

強く、強く、唇を噛む。
後悔……後悔……後悔、後悔、後悔後悔！
こんな事、今までで一度だって考えた事は無い、だってあまりにも虫が良すぎるだろう。
あんなに適当に返事をしておいて、あんなにおざなりに接しておいて、死んだ後にこれか。
大切なものは失って初めてその価値を知るとでも言うつもりか、ふざけるな。
一度亡くした者はもう二度と戻らない、そうだ、後悔してももう遅い、遅過ぎる。
気付かなかった価値のあった時間を、今しがた後悔した時を、俺は浪費し続けた、その結果がこれだ。
あまりに滑稽、何たる無様、一体どれだけの愚行を積み重ねれば気が済むというのか。
自分の愚かさに、そのまま憤死してしまいそうな程苛烈な怒りが込み上げる。
爪が食い込む力で手を握り込み、振り上げた両の手を自らの膝へ叩き付ける。
裁判でも神父でも神そのものでも、何だったら悪魔でもいい、誰でも良いから俺を裁いてくれ。
あまりの怒りに眩暈がして、温度の無いフローリングに膝をつき、顔を掌で覆って懇願する。
尽きない怒りを喘ぐ呼吸に乗せ、荒々しく吐き出し続ける。
けれど、そんな事をしたって何も変わりはしない。
過去や未来どころか、今だって何も。
自分という存在は、何時如何なる時も無力だ。
何でも出来る気になって、本気を出せば大抵の事は何とかなるなんて根拠の無い自信を本気で信じて、そうして貴重な機会をふいにするのが俺だ。
そうして後になって後悔する、救いようの無い大馬鹿だ。
気分が悪い、立っていられない位の眩暈と吐き気にどうにかなってしまいそうになる。
呼吸が浅い、身体から力が抜けて、土下座するような体勢になってしまう。
だがこんなにも醜悪な謝罪は無い、本物の土下座の方が余程見れるに違いない。
尽きない思考に頭は乗っ取られ、正体不明の不調に身体は動かず満身創痍、本格的に意識が薄れてきた。
世界がグルグルと廻り、視界が真っ白に漂白されていく。
自分が自分じゃなくなって、あれだけ湧いていた思考も綺麗さっぱり。
最後に、思った、事は、――――――――――――

――おはようございます、とは言っても昼ですが。

「あああああああぁぁ!!」

自分の悲鳴と共に飛び起きる、そんな体験をしたのは初めての事だった。
息が荒い、首が痛い、心臓は喉から飛び出るのではないかという程激しく心音を響かせ、目の奥がチカチカする。
どうやら座ったまま突っ伏す形で寝ていたらしいというのは、最初に認識した現状だった。
その次に認識したのは、どうしようもなく酷い吐き気。

「う……ぇ……」

そのまま戻しそうになったが、ここではいけないというブレーキが働き、唾液ごと吐き気を呑み下す。
一点を見つめたまま浅い呼吸をしていれば、次第に吐き気は収まってきた。
既に手遅れな気もするが、これ以上見苦しい姿を見せる訳にはいくまい。
ふと、そこで違和感、見苦しい姿を誰に見せる訳にはいかない？

「戻られたようですね。その様子ですと、かなり深刻な内容だったみたいですが。たまにいらっしゃるんですよね、こうして人生を左右するような後悔をご覧になる方。水くらいならありますが、お飲みになりますか？」

そのあまりに平然とした声、その事務的に雰囲気を壊す声、そしてその不思議と耳から離れない、声。
現実を信じられないまま、ゆっくり、ゆっくりと顔を上げる。
耳だけでは信じられない、ならば瞳に映った光景こそが真実だ。
その、視線の先には――

「何やら死者でも見たようなお顔ですが、茅場さんの見たい後悔は見られましたか？」

――新品のペットボトルを手に差し出し、首を傾げながら嫣然と微笑む仮面の女の姿があった。
ごくりと喉を鳴らし、問う。

「降魔、さん……？」

「ええ、何か疑うようなことがおありで？」

「いえ……いえ」

　そこまで来て、俺はようやっと現実に追いつく事が出来た。
　水晶玉に触れたとて何も起きず立ち去った――あれは辻褄合わせの為の偽の記憶だ。
　期待を裏切られた落胆も、掠りもしなかったガチャも、色を失った母の顔も、頽れる父の姿も、全部全部紛い物だった。
　現実では水晶玉に触れて暫くして、きっと降魔さんと一緒に触れていたあたりで俺は眠りに落ち、そこで夢を見ていたのだろう。
　どうしようもなく瞼の裏に焼き付いて離れない、あの最悪の悪夢を。

「いや……」

　悪夢と断じてしまうには、俺はまだ現状を何も知らな過ぎる。
　故に聞こう、答え合わせだ。

「降魔さん。俺がさっき見たのは、未来、なんですか？」

「正確に表すのであれば茅場さん自身の後悔、と言う他にないのですが、茅場さんが経験されていない光景だったのなら未来ですよ。確定した、ね？」

　意味深な言葉を紡ぐ唇を見た瞬間、脳裏に最悪の想像が浮かび上がった。

「確定したって事は……未来は、変えられない……？」

　その答えを聞くのが、ただただ怖い。
　一度聞いてしまえばもう取り返しがつかないという事実に、呼吸が落ち着かない。
　覚悟の定まらないまま、俺は答えを手にする。

「もちろん何も手を出さなければ後悔の通りに。ですが確定していたのは後悔を見たその瞬間までです。既に後悔を知った今はその限りではありませんのでご安心ください」

「そう、ですか。良かった……」

「あ、時間的制限だったり病気だったりはどうにもなりませんからね？私も神様ではありませんので」

　そう冗談めかして答える降魔さんの態度が、不覚にも安心の一助となって今は素直にありがたい。
　望んでいた回答は得られた、未来とやらは変えられる代物らしい。
　そっと胸を撫で下ろしていると、降魔さんが咳払いをして居住まいを正し始めた。

「それではこうして無事職務も果たせたことですし、報酬のご相談と参りましょうか」

　にやりといやらしく歪められる唇を見て、すっかり忘れてしまっていた代金の事を思い出した。
　降魔さんの話では後悔の内容に応じた金額との事だったが、不思議と法外な値段への怯えは全く無く、泰然とした姿勢で臨む事が出来た。
　それはきっと、既に自分の中で覚悟が極まっていたからだろう。

「分かりました。おいくらでしょうか」

「今回茅場さんにお支払いいただく金額は――十万円ちょうどとなっております」

「じゅ……っ！」

　絶句。
　十万円、覚悟はしていたが、正直に言って無理な金額だ。
　こちとら常時金欠の大学生、学生の本分を果たしつつそれだけの金額を貯めるのに、一体どれだけの時間と労力が必要になるのか。
　軽く想像しただけでも気が滅入る。
　その数瞬の沈黙を喪心と取ったか絶望と取ったか、降魔さんが幾分トーンを下げた声で口を開いた。

「――後悔、していますか？」

「え？」

「何も分からないままに連れて来られて、辛い後悔を見せられて、その上大金を要求される。

こんなところに来るべきじゃなかったと、後悔をしてはいませんか？」

　不意に、そう語る仮面の奥に叱られる子供じみた、不安気で幼気な顔が見えた気がした。
　ああ、何と都合の良い幻覚、何たる幻想か。
　装着された仮面は相も変わらず冷たい微笑を刻み、およそ人らしい感情等見えてこない。
　ふと、夢の中での最後の言葉が口を突いて出た。

「――次は後悔の無いように、だ」

「？」

「後悔なんて、ある訳無いじゃないですか。降魔さんが言ったんですよ、『決して後悔はさせません』って。あなたの言葉は正しかった。感謝こそすれ、後悔なんてするはず無いです」

「……」

「お金も必ずお支払いすると約束します。流石にすぐには無理ですけど、どれだけ時間が掛かっても必ず。それが俺の出せる誠意と感謝です」

　我ながら何とも青臭く、小っ恥ずかしい物言いをしたと思う。
　だがどれだけ恥ずかしくともこれが偽らざる自分の本心、ありのままの言葉なのだから仕方が無い。
　しかしこうもだんまりを保たれると話は別、羞恥に体が痒くなってくる。
　と、

「ありがとう、ございます……。こんなにも気持ちのいい言葉をいただいたのは初めてなので、少し照れてしまいますね。おほん。そのお礼と言っては何ですが、茅場さんには一つ言葉をお送りしましょう」

　そわそわとして耳が赤い事実を隠すように咳払い、降魔さんの唯一覗く口元が弧を描く。

「――しない後悔よりする後悔、ですよ」

　経歴を知らない、事情も知らない、それどころか顔すら見えないこの一言。
　そんな、拍子抜けする程にあっさりとした言葉を返した降魔さんの仮面の下は、きっと十万円以上の価値がある笑顔を浮かべているのだろうと、俺は心の底から満足した。

秋晴れの遠い空を見上げて、コンクリートジャングルの中を歩く。
こんなにも閉塞的な環境下で、しかし俺の心はかつてない程に透き通っていた。
理由は明白、これまで目標を持てずに持て余していたリソースを割り振る、身命を賭す誓いを得たからだ。
守りたい誓約と破れない誓約、両者に大きな違いは無く、二人のものか自分自身のものか程度の差異。
いずれにしろ難しく考える必要は無く、ただどちらも守り通す、それがこれまで受けてきた恩義への俺なりの報い方だ。
差し当たっては、

「今日の買い物ってどこに行くんだったかな」

希望と言葉と、きっとそれ以上の何かを手に、俺は光の中へ一歩を踏み出した。

2023 年 9 月 17 日　計 14987 字